



建造物のデザインと景観論

齋藤研究室～社会工学専攻



齋藤 潮 教授

例えば、晴れた日の空に悠然とそびえる富士を目の当たりにしたとき、あなたは何を感じるだろう。清々しい気持ちになるのか、その雄大さから威圧感を感じるのか。それはその時の状況、個人の感情によって大きく違うはずだ。

風景という現象は個人の心理に立脚している。それでは、そこに共通項は全くないのだろうか。この問いは、個人の心理を越えた人間の風景とは何かという問いに一致する。この問題を考えつつ、景観論について研究しているのが齋藤研究室である。



景観論と心の原風景

一般に環境と景観というものは同一視されがちだが、実はこの2つは違うものである。景観とは精神の内部的な働き（内的システム）を通して見える環境の一面なのである。そのため同じ環境でも人によって違って見えるということを前提にしなければならない。例えば、植物学者が山を見ると、彼の目にはその植生ばかりが映り、その植生が作り出す陰影の多様性にまでは恐らく気が回らない。しかし、逆に風景画家は植物一つ一つを知っているわけではなく、むしろ山の形や植物の織りなすコントラストなどに興味がある。これは個人の内的システムが同じ風景に対して違う反応をしている例だ。

しかし、全ての景観が完全に個人に帰属し、他人とは共有できないものであるわけではない。その理由は内的システムの形成方法に起因する。例えば、同じ風土や文化で育った人達がそれらの眺めに対して似たような感情を抱くことはよくある。また、人間の視界が360度でないことや首が一回転はしない、といった人間の身体的制約による共通の認識というものもある。

内的システムの違いを前提にした上で、その中

にどのような点で共通の認識や見方がありうるのか、また、時代の変化と共に個人の内的システムがどのように変化していくのか、ということを考えるのが景観論である。

景観を論じる際に重要になってくる、「原風景」という言葉がある。原風景には様々な観点があるが、それら全てを満足する形での定義を与えるのは難しい。しかし、少なくともその概念の中には幼少期から青年期にかけて過ごした環境の記憶に結びついた風景という意味合いは含まれている。但し、その自己形成期の記憶そのものがその人の原風景になるわけではない。

原風景というのは、もと居た土地を離れて全く違う環境に身を置いたときや、それが失われるときに立ち上がってくる風景イメージなのではないのかと齋藤先生は考えている。つまり、例えば今までと全く違う環境に馴染めずに辛い思いをしたときなどに、心の中にその辛さを埋めるような代償作用として原風景が立ち上がってくるのだ。しかし、全く違う環境に住んでいても自然の豊かな所に行くと気が休まるが、それは何故だろうか。この事実に対して齋藤先生は、自然が豊かだとい

う状況そのものが開発の進んだ都市に住む現代人にとっての代償作用になっているのではないかと考えている。つまり、生命体としての人間に対する救済の風景としてそのような自然の風景がある、ということだ。これは、個人の経験に基づく原風景というよりも、個人を越えた生命体にとっての原風景なのだ。

このように、個人個人の内的システムを越えた共通の価値観と風景との間にどういう関係があるのか、という観点から景観論を研究しているのが齋藤研究室である。

その中でも齋藤先生が大きな関心を持っているのが地方都市の景観である。その理由は、今まで地方都市の景観があまりにも疎かにされてきたからだ。近代文明が作り出した価値観というのは万

人受けする均質な価値観であるが、それはそれぞれの都市に対するその土地の人々の潜在的な思いを塗り潰してきた可能性がある。近代文明から遠ざかるのではなく、その地域の特性に合わせて上手く取り込むことが重要なのだ。それと同時に、この時代にとって良いものを作っていくことも重要だ、と齋藤先生は言う。つまり、古い時代の建物に愛着があるから古そうな建物を建てるというのではなく、古くから残っているものは大切に、その上で新しい時代に出てくる新しい建造物を認める。そしてこの時代にしかない、この土地でしか出来ない、つまり、時間軸と空間軸との中で自分の位置を認識できる空間を作っていくことが重要なのである。その考えのもとで齋藤先生の景観論は構築されている。

i-land プロジェクト

先に述べた地方都市景観の研究と関連して、以前、齋藤研究室ではi-landプロジェクトというプロジェクトに取り組んだ。これは、博多湾の一部を埋め立て、ISLANDCITYと呼ばれる新しい都市を作ろうというものである。ここで齋藤先生がやろうとしたことは、あらかじめ決められた土地利用区画に対する地域景観論の立場からの意味付けである。意味付けといっても、ただどこに何があったら便利だ、という機能的な面だけではなく、歴史的にこの場所は重要だとか、あの場所から何が見えると気持ちいいといったそこを利用する人の立場に立った風景的な意味付けである。

話をISLANDCITYに戻そう。先ずこの計画自体がバブル期のものであったため、現在の経済状況に合わせて当初の予定からかなりの変更が必要だった。当時はそこに新しい住宅地を作って売ろうという計画だったのだが、今となっては住宅の需要はさほど大きくはなくなった。そのため、住宅に代わって様々なテナントを募集したのだが、これも余り上手くいかなかった。そこで求められたのが人が住みたい、行ってみたいと思われるような魅力ある土地作りである。

そこで先ず齋藤先生が目をつけたのが、ISLANDCITYのすぐ東に位置している立花山である。この立花山は古くから信仰の山としてあがめられており、博多の様々な場所から海をまたいで



ISLANDCITYからの山々の眺め

眺められてきた。また、ISLANDCITYから見える他の山々よりも眺める時の仰角が大きいため、この島を特徴づけるのに有用だと考えたからである。そこで、齋藤先生は立花山が最も印象的に見える場所について調べ、新しい埋め立て地からの立花山の眺めに役立てようとした。新しい土地が海上にできるということは、そこを訪れる人達に新しい立花山の眺めを提供するということである。この眺めが立花山の新しい名所になれば素晴らしいことだ。なぜなら、昔から見てきた景観に新しい視点を用意することによって、博多という土地に対する愛着がより一層強まるかもしれないからである。その印象的な眺めが得られる場所と

して齋藤先生はあらかじめ緑地に指定されていた海辺の一区画を挙げた。

この眺めの話と関連して、博多湾北部にある海ノ中道という巨大な砂嘴にも注目した。島に高層ビルを立てるとしたら高さ何メートルにするか、という議論があったのだが、このビルを100mにするのと50mにするのでは砂嘴の眺めに大きな違いがあるのだ。50mだと海ノ中道が他の地形から分離して見えにくく、その存在が良く分からないが、100mあると海ノ中道の向こうに沖合がはっきりと見え、それが巨大な砂嘴であることが理解できる。これを理解することによって博多湾がどのように形成されたかのかが分かりやすくなる。

次に齋藤先生が目にしたのは、この埋め立て地が海に囲まれた人工島であるという事実だ。そこで暮らす人々がこのことを実感するためには、島の周囲から徐々に土を盛って緩やかな勾配をつけ、島のどこからでも海が見えるようにしたい。それに加えて、勾配をつけることによって他にも良いことが幾つかある。

一つは、そのような坂道があればジムなどに通うことなく日常的な活動によって心肺機能を強くできることだ。これはISLANDCITYの在り方を検討する医療関連のチームの意見だったが、我々の不健康は楽をしようとする行為の積み重ねの上にあると言うのだ。毎日、肉体的に刺激のある生活を送ることは非常に健康に良いのだ。もう一つの利点は島を巡る水路に関することである。齋藤先生の提案では、島の中心部に中水を溜める給水塔を作り、そこから大きく螺旋状に水路を作ると言うのだ。この水路には数多くの用途がある。まずは雨が降ったときの排水路としての役割である。次に、余り大きくはないがヒートアイランド現象の防止効果。そして更に、この水路の水面は干潮



海ノ中道

時と満潮時の水位の変化を知る指標となる。ISLANDCITYは人工島であるため感潮部では周りの海水の干満によって水路の水位が大きく変化する。これは、そこに暮らす人々が自然に囲まれていることを自覚する良い目印になるのだ。ここで、齋藤先生が中水を選んだ理由は、一つには海水は停滞するとすぐに腐ってしまうことで、もう一つは中水ならば飲用には適さないが車の洗浄や周囲の樹木に水を与えることなどには使えるからである。しかし、この勾配をつけるというアイデアは、既に下水道の配置計画が決定しているという理由や、建築物を建てるににくいという理由から結局は受け入れられなかった。しかし、もしそれを受け入れていたら、いくつかの事柄はこのISLANDCITYをより魅力的なものにしたことは間違いないだろう。

ここまで見ても分かるように、齋藤研究室ではそこにある風景の意味と、それを人々がどう認識するか、ということに主眼を置いて景観のデザインが行われている。これは先に述べた個々人の内的システムにおける共通の認識を探るという視点から行われている、と言い換えることもできる。



新潟みなとトンネルと千人沢砂防ダム

次に挙げるのは、以前齋藤研で取り組んだ土木構造物のデザインについてである。一つは、新潟県は信濃川河口に作られた新潟みなとトンネルだ。このトンネルは海底トンネルであるため、トンネルに近づくに従って道路の位置を下げっていくアプローチ道路が必要となる。齋藤研ではこのアプローチ道路とトンネルの内側のデザインを受け

持った。

i-landプロジェクトと同様に、このトンネルの建設計画もバブル期に練られたものであったために、今の時代と照らし合わせると建設費用の点で大変な不都合が出てきていた。当初の予定ではトンネルの内壁を結晶化ガラスという傷や汚れに強い物質で覆い、青色のグラデーションを付けイン

テリア感覚のデザインにすることで、土木構造物に対して一般の市民が持つ大きい、重たいといった圧迫感を抑えようとした。しかし、この結晶化ガラスが非常に高価であるためにこの計画は中止になってしまったのだ。そのため、それらの不都合を解消すべく齋藤研に新しいデザインの依頼が来た。

このデザインを考えるに当たって、齋藤先生が最も重視したのはその構造物の意味である。どういふことかということ、元の計画にあったようなインテリア風のデザインにして構造物の持つ圧迫感を抑えようとするのではなく、先ほども挙げたその時間、その空間というのと同じ意味でこの材料、この構造で作るといった、意味や本質をきちんと伝えるようなデザインが必要だと考えたのである。

この擁壁（アプローチ道路の側壁）はその外側から来る土の圧力を受け止めるためにかなり厚く重く作られている。これを普通に作り、ただ一枚ののっぺりとしたコンクリート壁にしてしまうと、その擁壁の意味が伝わりにくい。だから擁壁の構造的な制約条件が許す範囲で、この壁がそれ自体大変厚く、後ろの土圧をしっかりと支えていることを視覚的に表現しようとした。更に、このトンネルとそのアプローチ道路はただ重さや厚さを表現するだけでなく、それらによってこの空間が町の中ではなく港の外れにある、つまり、日常とはかけ離れた空間であることを体感できるようにデザインになっている。

この擁壁のデザインで齋藤先生が目論んだもう一つのことは、擁壁を見る位置によって見え方が多様になる、ということだった。アプローチ道路



千人沢砂防ダムの模型



新潟みなとトンネル左岸部

の部分では、擁壁の上端が地上に突き出している。これを周辺の緑地から見るとあそこに何かあるということだけが認識される。近付いて初めてそれが擁壁の一部だと分かる。一方、道路を通っている人から見ると視点の取り方によって立体的な擁壁のある部分は隠れ、ある部分はあらわれて、実際にはどんな形状をしているのかはすぐには分からない。つまり、そのトンネルを様々な角度から何度も経験してやっとそれを理解できるのだ。見えるものを積極的に見ようとするときにそれ相応の答えが用意されているのである。

齋藤研で取り組んだもう一つの土木構造物とは月山にある千人沢の砂防ダムである。これも先程挙げた新潟みなとトンネルのデザインと同じ観点からデザインされた。

元々砂防ダムというのは一切の砂を川に流さないようにするものではなく、緩んだ地盤のところへ雨が降って起こる土石流を和らげるためのものである。そのため、トンネルの擁壁の場合と同様に土圧を受け止める壁の存在感をいかに表現するかが重要となる。構造物の立体的な造形において齋藤先生が提案したのは、もともとある古い砂防ダムの上に、それが見えるように新しい砂防ダムを被せるというものだ。こうすれば、それを見る人が砂防ダムの履歴を理解することができる。

ここに挙げた二つの土木構造物は非常に好評で、依頼者側も満足しているということだ。

ここまで見てきても分かるように、齋藤研究室ではそのもの自身の本質から目を逸らさず、その意味をできるだけ曲げずに表現することを重視したデザインの研究を行っている。



これからの齋藤研は・・・

人間が共有しうる風景に関してはまだ分かっていないことが多い。それらを解明するためには人間そのものの研究が必要になってくるだろう。そこで、齋藤先生は地方都市のデザインなどに関わる際には先ず地元の人と談話することを心掛けている。そこで専門家としての意見と地元の人々の考えを理解し、その上で、直接現場を見てデザインを考える。齋藤先生の研究は全て自然の流れの中で行われているのである。

齋藤研では景観論のほかにも、それと関連した景観史や人間の身体的制約についての研究をしてきた。ずいぶん以前に齋藤先生が行ったのは、金閣や銀閣、薬師寺や東大寺を対象とした人間の視野に関する調査である。

例えば建立当時の東大寺で、中門から仏を祀っている金堂を見たとき、水平方向の見幅は56度ある。威圧的な仏教伽藍で国を治めようとしてきた時代の南都七大寺の金堂の見幅は40～60度に収まっている。60度の視野というのは人間が首を回転させずに対象が何であるかを瞬時に認識できる有効な視野だということが知られている。南都七

大寺はそれをフルに使っていると言えるのだ。

これに対して、魂の救済を求めた浄土式伽藍である金閣や銀閣を見ると、その代表的なビューポイントからの視野はおよそ10～30度である。この視角は、先に述べた60度の視野に比べてずっと小さい。つまり対象はかなり余裕をもって眺められることになる。このことは、デザインの意図と眺める時のストレスの大小との密接な関連性を伺わせる。

これまで挙げた研究や調査のいくつかは齋藤先生と学生の共同研究という形で行われており、これは齋藤研究室の大きな特色の一つと言えるだろう。つまり、学生は教官から専門家としての考え方を学び、教官は学生から若い視点からの刺激を受ける。そうすることによって常に新しい切り口からの研究が続けられるのだ。

真に独自の研究というのは非常に難しいが、新しいことを考えなくなった時点でその研究は終わりである。言い換えれば、何か新しいことをやるうとするには考えようとし続けなければならない、と齋藤先生は言う。

普段、何気なく目にしては通り過ぎてゆく様々な人工構造物。その全てに設計者が存在し、彼ら



は何らかの理由でその構造物に現在あるようなデザインを施す。我々の生活はデザインに囲まれていることは言うまでもないが、その一つ一つに、その構造物が存在する意味やそのデザインになった理由が込められているのである。

こう考えてみると、どんな構造物であってもその全てに我々人間と同じように存在理由があることに気付く。そう考えていくと、不思議なことに今までよりも周囲の構造物達が愛しく思えてくるのである。

最後になりましたが、お忙しい中快く取材や質問に応じて下さった齋藤先生に心からお礼を申し上げるとともに、今後の研究の発展をお祈りいたします。
(案西 稿志)

参考文献

篠原修 編、景観デザイン研究会 著「景観用語辞典」彰国社、1998

田村明「美しい都市景観をつくるアーバンデザイン」朝日新聞社、1997